

歴史

平城京遷都 ― 巨大な乱費と実行力の時代 ―

奈良県立図書情報館館長

国際日本文化研究センター名誉教授

千田 稔 氏



今の、日本は「ハコモノ」を作るのにむずかしい時代である。無駄な出費とする財政上の観点によるのだが、むしろ、これまでの「ハコモノ」の中味を充実させてこなかったことにこそ問題がある。企画・運営力に欠陥があるのだ。

710年に、奈良盆地の南にあった藤原京がわずか16年で破棄されて平城京に都が遷るといのは、今日の「ハコモノ」作りとは比較にならないほど、スケールの大きい無駄だといえる。「ハコ」ではなく、大きな「マチ」をすてて、また大きな「マチ」を作るというのである。現代ならば、国民はもちろん拒絶して当然だが、政治も国民の批判に耐えられないだろう。

672年の壬申の乱が、大海人皇子(のちの天武天皇)の勝利に終わって、天武天皇の政治が始まる。最初は、飛鳥にあった飛鳥浄御原宮(あすかのきよみはらのみや)に政治の中心をおいたが、天武は高らかに、「都は二つや、三つあってもいいではないか、まずは難波に都を作ろう」と宣言する。その意気軒昂である。真意は、中国の唐に長安と洛陽の大きな都が二つもあることを意識していたのではあるが、そのことから今の日本をふり返って見てはどうか。首都機能の移転でも移転先に関する議論が先行していることに 国民は 嫌気がさしていることがわからないのか、決断ができないのか。リーダーシップ欠如の時代にわれわれは生きているのだ。

天武が上のように宣言した時、すでに難波にはいわゆる「大化の改新」(今日では「乙巳(いつし)の変」という)の後に孝徳天皇の難波長柄豊碕宮(なにわながらとよさきのみや)が残っていたので、そのリニューアルということが念頭にあった。そしてまことに新しい中国式の都として大和三山の風景を取り込んで藤原京を建設するというのが天武の大構想であった。天武にとって無念ではあったが、藤原京の完成をまたずに亡くなり、飛鳥からの遷都は皇后であった持統女帝によって実施された。としても、都は難波と大和の藤原京の二つは存在したのである。主たる都は藤原京であったが、難波の都は難波津という港をもった国家的水運の中核であった。政治とそれにとまなう外交とがバランスをもって都が配置されたのである。

ひるがえって再び今日の日本の首都を思うが、首都機能の移転という、あまりにもスケールの小さなことを言い出すから、地方の活性化の問題にすりかえられてしまって、にっちもさっちもいかなかったのではないのか。なぜ、このグローバル化の時代に、古代のように首都を堂々と二つおくことの意義という大局観的視野に基づいた議論がなされないのか まことに不思議である。一つの首都は国際対応とし、もう一つの首都は日本的風景の中に構築すればよい。天武の考えた外交と内政のバランスをとった構図を再現する発想力がどうしてないのであるうか。

まことに無駄なことではあったが、藤原京はわずか16年で破棄されてしまうのだ。面積から見ても、大都市である。それを捨てるというのである。それを主導するのは、天皇ではない。娘を天皇の妃として外戚関係をつくり、政治の中核部ににじり寄ろうとする藤原不比等(ふじわらのふひと)である。不比等の娘、宮子と藤原京の二代目の文武天皇との間に生れた首皇子(おびとのみこ)を天皇の位につけるという野望を実現させるのが、律令を制定した官僚不比等のめざすところであった。そのための、藤原氏の大舞台、つまり首皇子が天皇としてデビューを飾るべき場として、奈良盆地の北の端に新しい都・平城京を作ることが決意されたのである。藤原京三代目の元明女帝は、平城京への遷都に反対であった。その理由はいうまでもなく、藤原京は天武天皇がうちだしたプロジェクトの都である。つまり「天皇の都」である。それに対して、平城京は藤原氏という官僚がおのれの氏族の力を誇示する都である。はっきりいって「藤原氏の都」である。元明女帝は気がおかないまま、和銅3年(710年)に遷都に従わざるをえなかったのである。

藤原京は、わずか16年、都市として成熟することもなく、藤原氏によって捨て去られたのである。このような事態を現代のわれわれが見たらどのように思うであろうか。大きな「マチ」を一から作るのに巨費をつぎこまねばならないのである。想像するに、藤原京を建設するのに関わった都市作りの技術者は、平城京造営のためにも雇用されたであろう。

「また、やり直すのか」と愚痴をこぼしたのではないか。難波京はリニューアルされて新しく改造される。やはり、複都制は継承されたのである。

平城京遷都のために投じられた巨大な無駄は、現代の政治システムとは異なるからその評価は簡単にできないではあろう。しかし、東京一極集中の中でしかものを見ない評論家たち はしょせん国土のシステムの在り方について、道州制などの地域主権的制度を導入すべきことをオウム返式的に発言し、東京の外からの発言 を知ろうともしない。政治力と行政力と実行力をもって国土論を語る人間がこの国にいないことを、平城京の遷都を重ね合わせながら、嘆くよりも、絶望感に襲われることの方が多い。

[ページを印刷する\(新しいウィンドウで表示\)](#)



[目次に戻る](#)

問い合わせ先

国土交通省 国土計画局 首都機能移転企画課

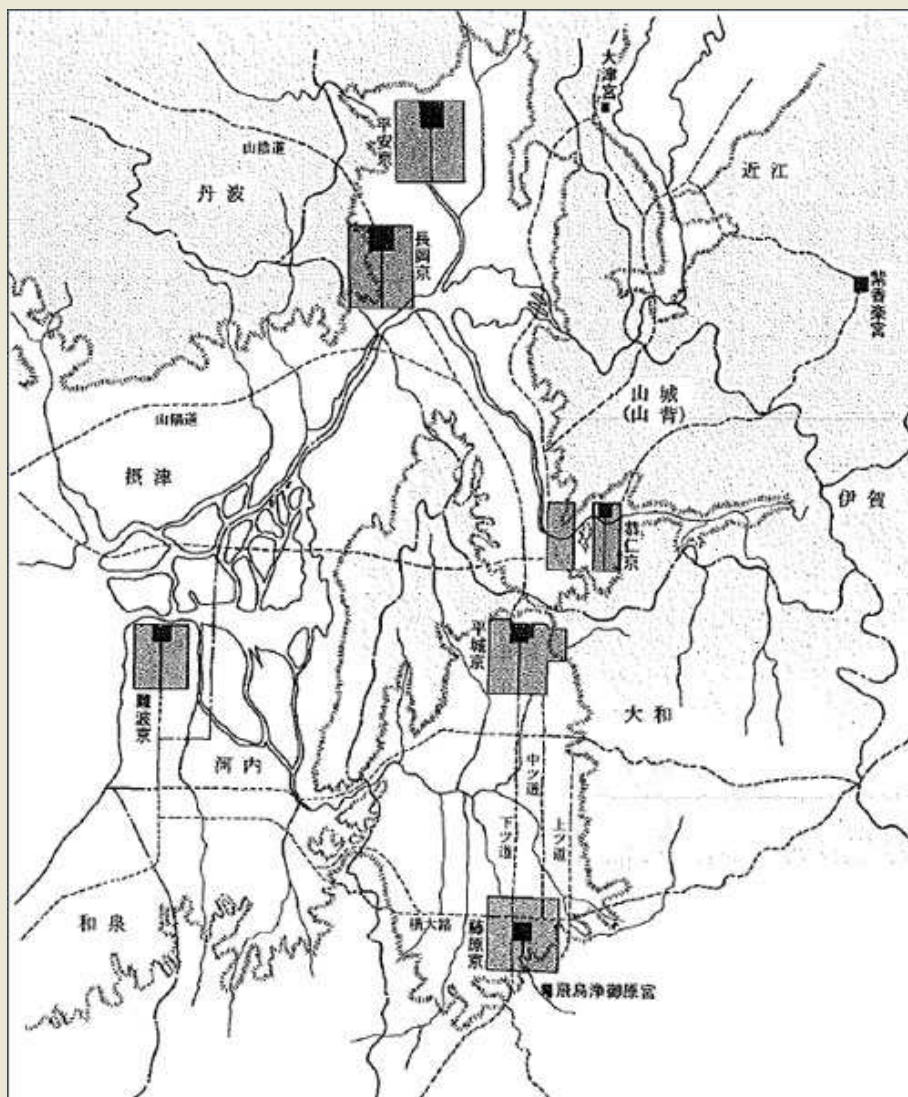
Tel:03-5253-8366 Fax:03-5253-1573 E-mail:itenka@mlit.go.jp

関連情報

古代都城位置図(奈良文化財研究所史料第57冊)

飛鳥、奈良時代の都の変遷(年表)

古代都城位置図(奈良文化財研究所史料第57冊)



飛鳥、奈良時代の都の変遷(年表)

年代	都の変遷	天皇	在位
		第35代 皇極(こうぎょく)天皇	642～645
645年	大化の改新(乙巳(いつし)の変)		
	難波長柄豊碕(なにわながらとよさき)へ遷都	第36代 孝徳(こうとく)天皇	645～654
		第37代 斉明(さいめい)天皇	655～661
	近江の大津へ遷都	第38代 天智(てんじ)天皇	668～671
		第39代 弘文(こうぶん)天皇	672～672
672年	壬申の乱	第40代 天武(てんむ)天皇	673～686
	飛鳥浄御原(あすかのきよみはら)へ遷都		
694年	藤原京へ遷都	第41代 持統(じとう)天皇	690～697
		第42代 文武(もんむ)天皇	697～707
710年	平城京へ遷都	第43代 元明(げんめい)天皇	707～715
		第44代 元正(げんしょう)天皇	715～724
724年		第45代 聖武(しょうむ)天皇	724～749

【参照情報】

- 一般財団法人 奈良県ビクターズビューロー

「奈良県観光情報 大和路アーカイブ」<http://yamatoii.nara-kankou.or.jp/>

- 奈良文化財研究所

ページを印刷する(新しいウィンドウで表示)



[目次に戻る](#)

問い合わせ先

国土交通省 国土計画局 首都機能移転企画課

Tel:03-5253-8366 Fax:03-5253-1573 E-mail:itenka@mlit.go.jp

大使館訪問記

駐日ブラジル連邦共和国大使館経済部長へのインタビュー(平成22年6月14日)

首都ブラジリアの過去、現在、未来～首都移転50周年を迎えて

駐日ブラジル連邦共和国大使館
経済部長

エドゥアルド・テイシェイラ・ソウザ氏

[ブラジリア首都移転の目的と経緯について](#)[旧首都リオデジャネイロ、最大の経済都市サンパウロへの影響について](#)[ブラジリア周辺地域の開発について](#)[ブラジリアに対する認知度について](#)[日本及び日本の首都機能移転について](#)

▶ 駐日ブラジル大使館ホームページ

<http://www.brasemb.or.jp/> (新しいウィンドウで表示)

ブラジリア首都移転の目的と経緯について

Q. 1960年のリオデジャネイロからブラジリアへの「首都移転50周年」おめでとうございます。まず、首都移転の目的からお伺いします。目的は、「貴国の内陸部振興による国土の均衡ある発展のため」と言われていますが。

A. ブラジリア首都移転の計画は、実は18世紀から、当時まだポルトガルの植民地だった時代からありました。19世紀末には、最適な地域を求めて地質学者などによる調査団が、移転先となりうる地域に派遣されています。そして、1956年に大統領に就任したジュセリーノ・クビチェック氏によって、首都移転が実行に移されました。

1950年代は、ちょうどブラジルが工業化を始めたときで、首都移転は非常に効果的に実現できました。1955年に着手して1960年にはほぼ完成したので、約5年間で完成したことになります。

首都移転の最大の目的は、「ブラジルのアイデンティティを構築すること」でした。ブラジルは多民族から構成されており、旧首都のリオデジャネイロはポルトガルの影響を非常に強く受けていたのです。そこでブラジルの多民族統一のため、国民国家を象徴するような一つの都市を造る必要があったのです。

2番目の目的は、それまでは沿岸部に人口が集中していて内陸部には人口がまばらでしたので、地理学的な戦略から、内陸部へも人口を分散させる必要性があったということです。

3番目の目的は内陸部の開発です。労働者を移住させ、土木工事を行ったり、あるいはセラード(低木草原地帯)の農業を振興する。セラードというのは「ブラジルのサバンナ」とも言われますけれども、非常に肥沃な土地ですが、農業を行うためには土地改良の必要がありました。この面では日本人移住者が多大な貢献をしています。

以上にあげた首都移転の当初の目的はすべて達成した、とすることができます。現在は人口が250万人を数えていますし、経済的な意味でブラジルで3番目に豊かな町になりました。一人当たりの所得は2万ドルに達していますし、教育レベルも全国で一番高くなりました。その他、映画、芸術、建築など文化面でも、全国の文化活動が集中する都市になっていますし、国内のみならず南米の中でもあらゆる文化が集まる都市になりました。したがって、ブラジリアとは「国内外の様々な思いを抱く人々がチャンスを求めて表現を行うまち」と言うことができます。

首都移転が行われた頃、ブラジリアで働いている人たちは、週末にはリオデジャネイロなど地元に戻るケースも多くみられたのですが、最近ほとんどなく、ブラジリアに赴任したての人でも地元に戻ることはあまりありません。ブラジリアが、外から来た人でも定住できるような独立した町として成熟していると言えます。

Q. 首都移転が5年間の短期間で完了できたのはなぜでしょうか。

A. やはりクビチェック大統領(注1)のリーダーシップによるところが大きい、と言えます。クビチェック大統領は極めてカリスマ性の強い人で、どんな人でも魅了することができたという伝説がある人物です。それが大きな推進力になったと思います。これはブラジリアの伝説の一つですが、クビチェック大統領は古代エジプトの君主であるファラオの生まれ変わりで、ブラジリアは古代エジプトの都市アケナトンの生まれ変わりで、と語られています。

5年間で完成したもう一つの理由としては、ちょうどブラジルの経済発展の時期に重なったということが挙げられます。当時、ブラジルの実質経済成長率は年率8~10%の勢いでしたので、経済的なダイナミズムが急速な首都移転を支えたと言えます。

(注1)ジュセリーノ・クビチェック大統領:ブラジル連邦共和国第22代大統領(任期 1956年1月31日から5年間)。チェコ移民の家庭に生まれ、1955年に大統領に選出された。「50年の進歩を5年で」のスローガンのもと、新首都ブラジリアの建設を強力に推し進めた。

Q. 首都移転するときに財政的な問題はありませんでしたか。

A. 首都移転を進めた1950年代はちょうど高成長の時代でしたので、新首都の建設に充てるキャッシュフローが非常に多く、そのため基本計画は自前の資金で開始することができました。しかし、ある段階からやはり融資が必要になって、何も無いところに町を造るのに、わざわざ借金までする必要があるのかという議論が生じましたが、結果的には、世界銀行や民間金融機関から融資を仰ぐことになりました。

旧首都リオデジャネイロ、最大の経済都市サンパウロへの影響について



Q. ブラジリア首都移転により、旧首都リオデジャネイロや、国内最大の経済都市サンパウロはどのような影響を受け、両都市の人々はどのように首都移転を評価していますか。

A. リオデジャネイロの場合は首都でなくなったことによって、都市計画が不在になってしまいました。リオデジャネイロは商業的にも工業的にも大きな都市ですが、首都としての都市計画が無くなってしまった結果、現在様々な問題を抱えています。

サンパウロの場合は、むしろブラジリア首都移転によってメリットを受けました。と言いますのは、首都移転に伴い様々な資本が投入されたのですが、ブラジリア開発に参加した資本の多くはサンパウロをルーツとする企業だったからです。

ただし、首都移転によって一番メリットを受けたのはサンパウロではありません。ミナスジェライス州のペロオリゾンテと、ゴイアス州首都のゴイアニアという二つの都市が内陸部開発に

よって最も発展しました。ペロオリゾンテとゴイアニアはブラジリアに、人、建築資材、鉄、設備機械類、食料などを供給する戦略的拠点として機能しました。特にペロオリゾンテの周辺地域は国内で最大の鉄資源を保有していることで有名です。さらに、ブラジリアへの首都移転は、ブラジルの沿岸部から内陸地域への移住を強力に促進しました。このような結果、ブラジル中央部の台地はブラジルのダイナミックな中心地として発展しました。現在、ペロオリゾンテ(人口250万人)とゴイアニア(人口150万人)はブラジルで最も発展した都市の一つとされています。また、カンポグランテ(人口75万人)、クイアバ(人口60万人)などもまた、ブラジリアへの首都移転に伴い大きく発展した都市です。こうした発展はいわば「ブラジル版西部開発」とも言うべきもので、1950年代から60年代に起こりました。1800年代後半に米国で起こった開発プロセスと似ていると言えます。

Q. 国を挙げてリオデジャネイロへの2016年オリンピック招致(注2)を図ったのは、リオデジャネイロの復興を目的としたものですか。

A. 実際、リオを再活性化するという大きな計画があります。なぜなら、リオデジャネイロはブラジルの顔で、ブラジルというと多くの方はリオデジャネイロをイメージするからです。

しかし、リオデジャネイロは過去20年間計画が無いため、極めて困難な状況に陥りました。現在は、リオデジャネイロのあらゆる街区を再活性化する計画ができ、オリンピックがそれに結びつけられています。リオデジャネイロの中心街には、ポルトガルやフランスの影響が色濃く残った、200年の歴史のある古い建築物がありますが、現在崩壊の危機に陥っています。そのような建築物を再建する計画がオリンピックとともに進められているのです。

(注2)2016年オリンピック:リオデジャネイロは、2016年第31回夏季オリンピックの開催地に決定された。南アメリカでは初の開催地となる。

、

Q. ブラジリアと、リオデジャネイロ、サンパウロ間の交通について教えてください。

A. ブラジリアと、リオデジャネイロ、サンパウロ間の人の移動は極めて多いです。距離的には双方ともに1,200km程度ありますので、一般的には空路によって移動します。日帰りでブラジリアへ行くというケースも多くあります。陸路は2ないし3車線の道路で結ばれていて、バス路線も多くの本数があります。夢としては、行く行くは新幹線でブラジリアとリオデジャネイロやサンパウロとの間を移動することです。

ブラジリア周辺地域の開発について

Q. ブラジリア周辺の衛星都市は現在どのような状態でしょうか。

A. プラーノ・ピロット(パイロット・プランの意味)地区というブラジリアの中心地がありますが、そのまわりに15とも16ともつかない衛星都市がブラジリア周辺にあって、それぞれの特徴が極めて異なっています。例えばタグアチンガという都市がありますが、ここは人口が約50万人で、商業が極めて発達しています。他方、セイランジャという都市があり、人口が30万人ぐらいですが、極めて貧しい人々が住んでいます。政府の援助で上・下水道がようやく完備したばかりです。

現在の最大の課題は、衛星都市からブラジリアまでの輸送手段を建設することです。また、様々な政府の援助にも関わらず、社会参加できない人々がまだまだ多いという問題もあります。

1990年代末には住民の所得格差が拡大して、社会不安の危険性もありましたが、その後、カルドゾ前大統領の時代からの社会政策により、貧困階層から中流の下あるいは中クラスに、過去10年間で約3,000万人が移行しました。そのため、近年格差は緩和されてきています。

Q. 今後のブラジリア周辺の開発計画について教えてください。

A. 今後15年間の開発では、ブラジリアと先ほどお話したゴイアニアという都市を結ぶ地域の開発が、現在検討されています。

この2都市と周辺を含めると人口が450万人で、しかも極めて収入の高い人たちが住んでいて、バイオテクノロジーの研究とか、民間航空機産業の開発にポテンシャルを持っています。アナポリスという都市に航空宇宙関連の産業があるので、今後15年間の目標として、これらの2都市を結んだ地域の先端技術の開発が検討されています。

ブラジリアに対する認知度について

Q. ブラジリアに対する国民の国内外の認知度はいかがですか。

A. ブラジル人全体のブラジリアに対するイメージですが、私の個人的な感触では、ブラジリアについてのブラジル国民一般の認知度は非常に低いと思います。ブラジリア関連のニュースに出てくる話題は政治や行政関連のものばかりで、実際には文化活動も非常に盛んでダイナミックな町ですけれどもそういったイメージは国民には十分に伝わっていないのです。

ブラジル国民のブラジリア訪問者数は年間約250万人で、その大多数が業務上の出張等によるもので、観光目的で訪れる人は極めて少ないです。外国人もアマゾンやブラジルの海岸に行く方がほとんどで、ブラジリアを訪れる人は年間25万人程度と非常に少ないのです。

一方、ブラジリアを訪れる外国人の多くは、建築に興味がある方々です。と言いますのは、ブラジリアはアテネ憲章(注3)の理念に基づいて造られており、ル・コルビュジェやバウハウス(20世紀初頭ドイツの建築を中心とした芸術学校)の影響が極めて強い建築物になっています。

(注3)アテネ憲章:建築家たちの国際会議である近代建築国際会議(CIAM)の1933年に行われた会議で採択された、都市計画及び建築に関する理念。「機能的都市」を議題とした会議で採択され、建築家ル・コルビュジェ(鉄骨造や鉄筋コンクリート造という新技術により、機能的・合理的で普遍的なデザインの建築を手がけた)の提唱する機能的な都市を内容としている。

Q. ブラジリアの問題点を挙げるとしたら、どのようなことでしょうか。

A. 現在ブラジリアが抱えている問題は、当初計画よりも極めて大きく発展してしまったことです。当初の計画では「2000年に人口が60万人」という予測だったのですが、衛星都市を含めたブラジリア連邦区全体の人口は現在260万人に至っています。

現在、ブラジリアの中心であるプラーノ・ピロット地区はユネスコの文化遺産にもなっていますが、その30～40km周辺に、インフラ、教育、あるいは治安面で深刻な問題を抱える衛星都市があります。ブラジリアの中心地区は非常に豊かなのですが、衛星都市とは著しい所得格差が生じてしまっているのです。

Q. ブラジリアの魅力について具体的に教えてください。また、ブラジリアは今後どのように変化していくべきなのでしょう。

A. 一番好きなところは、「個人に圧倒的な自由を与える」という側面です。というのは、ブラジルのあらゆる地域、あるいは地球上のあらゆる地域の人々がブラジリアに来るわけですが、「どんなアイデンティティを持つこともできる」という究極の自由さがあります。様々な宗教の活動もありますし、あらゆる面で自由な生き方ができることが魅力です。

また、ブラジリアの人々にはぜひ東京の地下鉄を見習ってほしいと思います。ブラジリアでは公共輸送手段の整備は遅れており、東京のような地下鉄網があれば極めて便利ではないかと思います。

私の最大の夢はブラジルで日本の新幹線が走っているところを見ることです。現時点で、入札がもう少しで開始というところまで来ています。現在、財務的な問題から会計監査院でいろいろ審査をしているところですが、たまたま今年は選挙の年ということもあり、タイミングをはかっているところだと思います。ブラジルとしては新幹線の導入、高速鉄道の導入に極めて期待が高まっていて、最初はリオデジャネイロ・サンパウロ間ですけれども、両都市だけにとどまるものではないわけで、行く行くはブラジルの主要都市をすべて新幹線で結ぶというのが大きな目標です。

Q. 200年かけて首都移転の計画を立てて、1960年に移転して50年たちました。リオデジャネイロからブラジリアに首都を移したことは、結果的には良かったと思われますか。

A. ブラジリア首都移転は不可欠なことだった、と言えると思います。国の単なる経済的な要因とかインフラの問題を超えて、「国家のアイデンティティを構築する」という意味で不可欠な事業だったと考えています。

ポルトガル、フランス、米国、そういった国々の影響を乗り越えて国家のアイデンティティを作るという意味があったわけですね。ブラジリアという都市はフランスなどの建築に影響を受けていますがブラジル独自のものですし、ブラジルという若い国が自分のアイデンティティを確立する上でブラジリア建設が重要だったと思います。現在では、ブラジリア建設に疑問を挟む人間は一人もいないと信じています。

日本及び日本の首都機能移転について

Q: 日本に対する印象や日本の首都機能移転について何か感じるところがあればお聞かせ下さい。

A. 私は日本に着任して1年半になりますが、日本のことは非常に好きです。すばらしい国だと思います。日本で首都機能移転を行おうとしたら、国民に十分に情報発信することが重要ではないでしょうか。ブラジリア建設でも、国民から見てどの建設案が好きか嫌いかということ进行を問うたり、都市計画のコンペをやって国民の関心を高めたわけですが、そのように国民を議論に参加させることが重要ではないでしょうか。

私が日本を旅行して知った限りでは、例えば日本人はエコ観光に極めて関心が高いとお見受けしますので、そのような要素も興味を喚起する上で取り入れても良いと思います。

日本にすばらしい最先端のテクノロジーを備えた新しい都市が造られることを夢見ております。



DD Wave/Embassy of Brazil

[ページを印刷する\(新しいウィンドウで表示\)](#)



[目次に戻る](#)

問い合わせ先

国土交通省 国土計画局 首都機能移転企画課

Tel: 03-5253-8366 Fax: 03-5253-1573 E-mail: itenka@mli.go.jp

世界の国会議事堂

～デザインが示すもの～

ブラジル連邦共和国(ブラジリア)パラオ共和国(マルキョク)

ブラジル連邦共和国(ブラジリア)

上下両院の性格を表した議事堂の形



ブラジル連邦共和国の国会議事堂

ブラジリアにある国会議事堂は、ブラジル出身のモダニズムの建築家として名高いオスカー・ニーマイヤー氏の設計によります。正面から見ると、左側に半球を伏せた形の上院の議事堂、右側には反対に半球を上を開いた形の下院の議事堂があり、間に議会事務局が入っているツインタワーがあります。ニーマイヤー氏によると、上院は保守的な性格の議会なので上に閉じた形、下院は人々の声をよく聞き新しいアイデアを出すべき議会なので上に開いた形にした、とのこと。このように「議会」の性格を形に表した議事堂は、世界にただ一つしかないと言われています。

パラオ共和国(マルキョク)

世界にアピールするシンボルとしての議事堂のデザイン

マルキョクにある大統領府や議会の入る建物は、西洋風の白い建物で、米国の大統領府と同様に「ホホワイトハウス」と呼ばれています。1994年に独立したばかりのパラオでは、議事堂のデザインを米国の建築事務所に依頼し、いくつかの案を出させました。その中には他のミクロネシアの国にもある伝統的なものもあり、それが良いという議論もありましたが、あえて、欧米の議事堂で多く採用されているデザインを選択したそうです。その狙いは、パラオは独立国として、世界に対し欧米先進国と同様に「文明、民主主義、自由」の国であることをアピールしたい、との思いがあったとのこと。



パラオ共和国の議会等が入る建物

※この記事は、ミノル F.X. ウエキ駐日パラオ共和国大使の御協力により取りまとめました。ここに記して感謝の意を表します。(同大使館への訪問の様子は、Webニュースレター71号「大使館訪問記」において詳しく掲載する予定です。)

[ページを印刷する\(新しいウィンドウで表示\)](#)



[目次に戻る](#)

問い合わせ先

国土交通省 国土計画局 首都機能移転企画課

Tel:03-5253-8366 Fax:03-5253-1573 E-mail:itenka@mlit.go.jp

世界の首都機能移転

～強力なリーダーシップが必要な首都移転～

ブラジル連邦共和国(ブラジリア)パラオ共和国(マルキョク)

ブラジル連邦共和国(ブラジリア)

「古代エジプト君主の生まれ変わり」と言われるクビチェック大統領」



((C)外務省HP)

「ブラジリアへの首都移転」は、新都市が着工からわずか5年間という驚異的な速さで完成しました。その最大の理由は、1956年に大統領に就任したジュセリーノ・クビチェック氏が「50年の進歩を5年で」というスローガンのもとに、自らの任期中に新都市を完成させるという強い意志をもっていたからです。移転を可能としたのは、当時ブラジル経済が高度成長していたこともありますが、同大統領が強力なカリスマ性とリーダーシップを発揮したことが大きいようです。クビチェック氏が、どんな人でも魅了してしまう魅力を持っていたことが、首都移転に関わる人々を鼓舞し、驚異的ながんばりを生み出したのでしょう。ブラジリアでは、同氏は「古代エジプトの君主ファラオの生まれ変わり」と言われ、今でも「JK(ジョタ・カー)」と呼ばれ市民から慕われているそうです。ただし、短期間で新都市を建設しただけではなく、世界遺産に登録されるほどの斬新なデザインと建設を実現したことも忘れてはなりません。このように首都移転を意欲的に進めただけでなく、首都としての景観にもこだわったからこそ、ブラジリアは今日人口250万人を超え、経済的に豊かであるだけでなく文化活動も盛んな首都になったのでしょう。

※ この記事は、駐日ブラジル連邦共和国大使館エドゥアルド・テイシェイラ・ソウザ経済部長の御協力により取りまとめました。ここに記して感謝の意を表します。(同大使館への訪問の様子は「大使館訪問記」に詳しく掲載しています。ご覧ください。)

パラオ共和国(マルキョク)

首都移転を加速させたナカムラ大統領



((C)外務省HP)

パラオ共和国のコロール島コロールからバベルダオブ島マルキョクへの首都移転は、2006年10月1日(独立記念日)に行われました。移転前のコロールは同国の全人口約20,000人の約65%が住み、全島が市街地化して過密状態になっていました。こうした状況もあり、戦後の国連の太平洋信託統治領としての米国統治の中で、1981年に発足した自治政府により制定された憲法により首都を移転することが定められ、憲法制定後10年以内に移転先を決めることになりました。その後首都コロールから約30km離れたマルキョクへの移転が決まり、地元から土地の提供、米国からの200万ドルの資金支援が決まると、1993年に大統領に就任した日系人のクニオ・ナカムラ氏は、首都移転を進める大統領令を出して、移転を加速度的に進めました。ナカムラ大統領は1994年に首都移転アドバイザリー委員会を設置し、同委員会で議事堂のデザインを決め、1996年には国家首都建設法を成立させて1998年から議事堂の建設に着工しました。そして、2001年に議事堂が完成し、2006年に実際に移転しました。

※この記事は、ミノル F.X. ウエキ駐日パラオ共和国大使の御協力により取りまとめました。ここに記して感謝の意を表します。（同大使館への訪問の様子は、Webニューズレター71号「大使館訪問記」に詳しく掲載する予定です。）

[ページを印刷する\(新しいウィンドウで表示\)](#)



[目次に戻る](#)

問い合わせ先

国土交通省 国土計画局 首都機能移転企画課

Tel:03-5253-8366 Fax:03-5253-1573 E-mail:itenka@mlit.go.jp

各地域の情報

国会等の移転に関する各地域の主な動き

福島県

その他 Topics

奈良県(2010年平城遷都1300年祭)

三重県(パラオ共和国とのつながり)

福島県

首都機能移転三地域連絡会議(栃木・福島地域、岐阜・愛知地域、三重・畿央地域)の代表者は、平成22年3月17日、衆議院、参議院及び国土交通省を訪問し、国会等の移転に関する政党間両院協議会の現在の状況や今後の開催見込み等に関する情報収集を実施しました。

奈良県(2010年平城遷都1300年祭)

奈良県では、2010年の幕開けとともに、「平城遷都1300年祭」がスタートし、4月24日から、平城宮跡(メイン会場)において、連日イベントが開催されています。平城宮跡では、第一次大極殿の復原が完成し、当時の人々の営みや技術を体感いただくことができます。また、平城京歴史館では最先端のVR技術により再現された往時の壮麗・壮大な都の姿や華やかな文化・遣唐使の歴史や渡航の様子等をご鑑賞いただけるとともに、遣唐使船が復原、展示されています。さらに、平城京なりきり体験館では、疑似発掘体験や天平衣装体験をお楽しみいただけます。10月9日(土)からは、秋季「平城京フェア」が開催され、フェア最終日の11月7日(日)には、フィナーレを飾るクロージングイベントとして祝祭カーニバルを実施し、来場者とともに盛り上がりを図ります。他にも、秘宝秘仏の特別開帳や伝統行催事など、見どころたっぷりの奈良に是非お越しください。詳細は「平城遷都1300年祭」HP <http://www.1300.jp/> をご覧ください。



第一次大極殿



遣唐使船

三重県(パラオ共和国とのつながり)

パラオ共和国の1981年に施行された憲法には「暫定的な首都をコロールに置き、10年以内に恒久的な首都をバベルダオブ島に指定すること」と明記されていましたが、計画は進まずに放置されていました。その後、1999年にクニオ・ナカムラ元大統領が首都移転の計画を立案し、憲法の施行から25年経った2006年10月1日のパラオ共和国独立記念日に、コロールからマルキョク(バベルダオブ島)に首都を移転しました。

クニオ・ナカムラ元大統領は、実父が伊勢市大湊出身であり、1993年8月の知事表敬をはじめ、独立前から三重県を数回訪問していました。また、独立後間もない1994年10月には、「まつり博・三重'94」に参加するため民族舞踊団を伴って三重県を訪問し、まつり博を成功へと導く一助となり、さらに親交を深めました。

その後、三重県は、大正時代より日本と密接な関係があり、特に、美しい海という豊かな自然に恵まれているという共通点があることなどから、1996年7月25日に、ナカムラ元大統領をはじめとするパラオ共和国代表団を迎え、友好提携を締結しました。

[ページを印刷する\(新しいウィンドウで表示\)](#)



[目次に戻る](#)

問い合わせ先

国土交通省 国土計画局 首都機能移転企画課

Tel: 03-5253-8366 Fax: 03-5253-1573 E-mail: itenka@mlit.go.jp